ASHUREY CLASS主催

1st 「セレブレイト・マッツォート」

1.「種なしパンの祭り」の回復の必要性

2023. 4. 09 (夜)

1.「マッツォート」が意味すること ①

●キリスト教会は、「過越の祭り」と「初穂の祭り」が啓示するイェシュアの十字架の死と復活のみを記念して祝ってきましたが、それに続く「種なしパンの祭り」の意義をまったく軽視してきました。七日間におよぶ「マッツォート」(מַצּוֹת)の祭りが意味していることは何でしょうか。神はなぜこの祭りをするように言われたのでしょうか。「種なしパンの祭り」を「除酵祭」とも言います。それはイスラエルの人々が神のことば、あるいは神のことばであるキリストのみによって生きるためです。そのために、「パン種」を家の隅々まで捜して見つけ出し、それを取り除かなければなりませんでした。キリスト教会にも多くのパン種が存在するのです(マタイ13:33)。

1.「マッツォート」が意味すること ②

【新改訳2017】マタイの福音書13章33節
イエスはまた、別のたとえを彼らに話された。「天の御国はパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの小麦粉の中に混ぜると、全体がふくらみます。」

●このパン種のたとえは(前節のからし種とともに)、御国が成長する話と解釈されることがあります。しかし聖書でいう「パン種」は常に、悪い教え、暗闇で働くサタンの影響を意味します。イエシュアは弟子たちに「パリサイ人たちやサドカイ人たちのパン種に、くれぐれも用心しなさい」と言われましたし(マタイ16:6、マルコ8:15)、パウロも道徳的な悪というパン種(Ⅰコリ5:6～8)、「割礼は受けるべきもの」とするパン種についても述べています(ガラ5:9)。ですからマタイ13章のパン種も、同じ意味で理解しなければなりません。この世ではパン種(イースト菌)の入ったパンはやわらかくて、美味しく感じるものです。そしてパン種の入らないパンは固くて、美味しくなく感じるのです。しかし神の目からすると、それは「甘く、味わいのあるパン」なのです。

1.「マッツォート」が意味すること ③

【新改訳2017】Ⅰコリント人への手紙5章6～8節
6 ・・わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。7 新しいこねた粉のままでいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。8 ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。

●「古いパン種」とは「この世の教え、幼稚な教え」といったストイケイア」、および「常識的・倫理道徳的な教え、人の心を喜ばす自己啓発的な教え」などを意味します。しかし「誠実と真実の種なしパン」とは、イエシュアが語る「霊であり、いのち」であり、御国に関する話です。

1.「マッツォート」が意味すること ④

●「過越の祭り」(ペサハ)、「初穂の祭り」(レーシート)、「種なしパンの祭り」(マッツォート)の三つは「一連の祭り」です。これらの祭りは、神の民がキリストの「死と復活」という「甘い香り」の出来事に基づいて「新しく造られた者として生きる」という祭りなのです。

●主にある者たちが「種」(イースト菌)という「肉」に死んで、「種」の入らない祭り(礼拝)をしていこうというのが「種なしパンの祭り」(マッツォート)です。それが「割礼」の意味するものです。つまり「いのちを与える御霊」という「聖なる油注ぎ」によって生きることを意味するのです。このことを意識して生きるために、「マッツォート」(種なしパン)の祭りを回復する必要があるのではないでしょうか。

2.「聖なる油注ぎ」による歩み ①

●神と人とがともに住む幕屋の「聖なる注ぎの油」は、復活されたイェシュアの「いのちを与える御霊」の型なのです。それは人の霊を回復して、その中にキリストが御霊として内住されることを意味します。たましいではなく、人の霊の中に御霊が内住されるということがすでに包括的になされたのです。それは、人が「霊によって生きる」者とされたことを意味しています。復活後40日間、イェシュアは弟子たちの前に現れ、「息を吹きかけ」て、再度、御国の福音を語ります。弟子たちは「聖霊」を受けたことで、このときに初めて御国の福音についての理解を得ることができたのです。私たちもすでに聖霊を受け、霊によって生きることが始まったことを個別的に知って生きることが、「マッツォート」を行う理由と目的です。つまり、私たちの霊と御霊がミングリングすることで「新しく造られた者」となったことを自覚することです。そのためには「たましいと霊を区別する」ことが重要です。

2.「聖なる油注ぎ」による歩み ②

●イスラエルの民がエジプトから救い出されたのは、彼らが「王なる祭司」として生きるためでした。キリストにある私たちもその例外ではありません。私たちは信徒(平信徒)ではなく、「王なる祭司」なのです。

【新改訳2017】創世記2章15節

神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

●「耕す」(「アーヴァド」עָבַד)は祭司用語であり、神とともに過ごし、神の声を聞き、顔と顔を合わせるようにして神を知ることを意味します。この務めは人がエデンの園から追い出された後も変わりません。エデンではその務めを守るための権威が与えられていましたが、蛇の巧妙な嘘によってその務めと権威を喪失しました。つまり、霊の働きは機能不全を起こしたのです。しかし神はその務めと権威を回復すべくアブラハムを召し出し、その子孫であるイスラエルの出エジプトの出来事によって回復しようとされました(出19:6)。これは「最後のアダム」による贖いの予型です。「最後のアダム」による贖いの目的は、ひとえに「王なる祭司」の回復なのです。

2.「聖なる油注ぎ」による歩み ③

●「幕屋」を聖別するための「聖なる注ぎの油」があります。これは四つの香料と油を調合して作られたものですが、その四つの香料とは「没薬、シナモン、菖蒲、桂枝」です。「没薬とシナモン」は死を象徴し、「菖蒲と桂枝」は復活を象徴します。この「聖なる注ぎの油」は、祭司たちや幕屋にあるすべてのものに注ぐことによって、それらを聖別することができたのです。

●私たちにも同じくこの「聖なる注ぎの油」が与えられているのです。

【新改訳2017】Ⅰヨハネの手紙2章16～17, 20節

16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。

17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。

20 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。

2.「聖なる油注ぎ」による歩み ④

●「聖なる方からの注ぎの油」が与えられる根拠は、「聖なる香」が神に献げられていた事実があるからです。その事実とは、イェシュアの人性としての務めです。幕屋での「聖なる香」は「ナタフ香、シェヘレテ香、ヘルベナ香、乳香」と塩が調合されたもので、先の三つの香料は死を象徴しています。そして乳香は復活を象徴します。この「聖なる香」こそ、イェシュアが神に献げた「甘い香り」なのです。このことによって、私たちに「聖なる注ぎの油」が与えられるのです。恵みの賜物です。

●「聖なる香」と「聖なる注ぎの油」は、神と人を結びつけるために不可欠なものです。「二つで一つ」です。このことを実現することがキリストの職務であり、私たちが「王なる祭司」の務めをすることのできる土台となります。ですから、キリストなしには私たちは何もできないのです。

●そこで最後に、私たちはこのキリストにあって「乏しいことがない」ということを心に深く留めたいと思います。

3.「乏しいことがない」①

●「マッツォート」が回復されるなら、私たちは「乏しいことがない」ことを確信できるはずです。私たちはキリストにあって「満たされている」からです。このことを自覚することが非常に重要です。

【新改訳2017】詩篇23篇1節

【主】は私の羊飼い。私は乏しいことがありません。

יְהוָה רֹעִי לֹא אֶחְסָר

●これは偉大な信仰告白です。この信仰を自分の口に出してみることです。「私は乏しいことがない」(「ロー・エフサール」לֹא אֶחְסָר)。この告白をたましいではなく、霊の中で「ベシェーム・アドナイ」、あるいは「シェーム・イェシュア」と叫びながら「ロー・エフサール」と言ってみましょう。このことばを、ACの合言葉としましょう。口に出すことで霊の中に信仰が働きます。なぜ乏しいことがないのでしょうか。

3.「乏しいことがない」 ②

【新改訳2017】ガラテヤ人への手紙2章19～21節

19 しかし私は、神に生きるために、律法(=キリスト/「律法が目指すものはキリスト」ロマ10:4)によって律法(律法主義)に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。

20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに(=私の霊の中に)生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法(=律法主義による行い)によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

3.「乏しいことがない」 ③

●イェシュアの十字架の尊い死、すなわちイェシュアの人性としての務めは最初のアダムを終わらせることでした。そのために洗礼において私たちを取り込んでくださったのです。そして三年半の後、死んで三日目によみがえられました。イェシュアは復活の初穂であるご自身を御父に献げるために秘密の昇天をされ、その日の夕べに、弟子たちの霊の中に「いのちを与える御霊」となって入ってくださいました。こうして包括的に私たち人の霊を再生し、その中に御霊として内住してくださったのです。このことをイェシュアは前もって約束しておられました。仮庵の祭りの最終日である八日目の「大いなる日」に、イェシュアは次のように語られました。

【新改訳2017】ヨハネの福音書　7章37～39節

37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だ
れでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。38 わたしを信じる者は、聖書が
言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」
39 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。
イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。

3.「乏しいことがない」④

●ここでイェシュアは「渇いている者」に呼びかけています。祭りの最終日、人々は満たされているかと思いきや、満たされていないことをイェシュアはただ一人見抜いていたのです。そして「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります」と言ったのです。「人の心」とは「泉」の部分ですが、「その奥底」とは「深い淵」(テホーム)に相当する部分です。その「深い淵」は天に直結しているため、そこが源泉となって「泉」は枯渇することがなく、絶えず尽きることのない新鮮な水が供給されるのです。

●最初のアダムの罪のゆえに、人の霊は機能不全を起こしています。ところがその部分が回復して「生ける水の川が流れ出るようになる」ということです。人の霊の部分から生ける水が流れ出るようになるので、渇きが満たされるということです。これは、イェシュアを信じる者が受けることになる御霊によって可能なのです。ただし、イェシュアがまだ栄光を受けておられなかったので「御霊はまだ下っていなかった」とありますが、原文は「彼はまだ霊ではなかった」となっています。

3.「乏しいことがない」 ⑤

●イェシュアの「その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」という約束は、復活の日の夕方に成就しています。弟子たちの霊の中に御霊がすでに住んで、満たされているのです。この「満たされる」ということばと「成就する」ということばは、「プレーロー」(πληρόω)という同じことばです。

●復活の日の夕方にイェシュアは地上に戻って来られ、弟子たちが隠れていた部屋に入って来て、息を吹きかけて、「聖霊を受けよ」と言われました。弟子たちはその息を吸い込んだので、ここで聖霊を受けたのです。イェシュアの約束がこのとき成就したのです。7章38節で約束された「生ける水の川」である聖霊に弟子たちは満たされたのです。これはイェシュアが復活して「いのちを与える御霊」となって人の霊を回復し、その中に内住されたことを意味しています。

今回のまとめ

「復活のいのちに生きる」＝「霊の中で生きること」

●「聖書の最高の教えは、霊の中で生きることです」という言葉は、ウイットネス・リーのものです。私もこの言葉を信仰50年目にして「アーメン」と受け留めました。イェシュアの語られたことばは「霊であり、いのち」です。イェシュアの語ることばが私たちの霊の中で「聖なる油注ぎ」となるのです。復活されたキリストは「いのちを与える御霊」となって、今や私たちの霊の中におられます。「主は御霊です」(Ⅱコリ3:17)。ですから、キリストを信じる者はその霊(三一の霊)とともにあるのです。三一の神の知恵と知識の富(＝膨大な源泉)が今や私たちの中にあるのです。「知恵と啓示の霊(御霊と人の霊のミングリング)」(エペ1:17)によって、キリストにあるすべてを得ることができるようにしてくださっているのです。そのために、神は私たちを捕らえてくださったのです。それゆえ私たちは

「アドナイ・ローイー・ロー・エフサール!!」なのです。